

第31期第5回仙台市図書館協議会会議録

- ◎ 会議の日時・場所 令和6年1月30日(火)10時00分～12時00分
仙台市役所上杉分庁舎2階 第2会議室
- ◎ 出席委員の氏名 狩野富士子委員、児玉忠委員、小林直之委員、齋藤千里委員、
杉山秀子委員、高橋由臣委員、竹内透史委員、矢嶋哲也委員、
渡辺祥子委員、渡邊千恵子委員
- ◎ 事務局職員氏名 市民図書館長 樋口千恵、市民図書館副館長 千葉正数、
広瀬図書館長 菊池雅人、宮城野図書館長 岩淵明広、
榴岡図書館長 柴田雅子、若林図書館長 村上佳子、
太白図書館長 湯村倫子、泉図書館長 那須野昌之、
市民図書館企画運営係長 宍戸信宏、
市民図書館奉仕整理係長 吾妻由美、
市民図書館奉仕整理係主査 浅野佑一

◎ 会議の概要

1 開会

2 挨拶

市民図書館長挨拶

会長挨拶

3 会議録署名委員指名

会長より杉山秀子委員を指名。

4 報告事項

(1) 令和5年度の事業成果について

(市民図書館副館長・各館長 報告)

資料1に基づき報告

[委員からの質問・意見等]

議 長 榴岡公園パークマネジメント社会実験の中で榴岡図書館がブックトレードを行ったと
いうことであるが、実際に実施してみて、手応えのようなものはあったか。

事務局 X(旧Twitter)で発信したことにより、榴岡エリアなど近隣の地域の方だけでなく、
大崎市など遠方からもお越しいただいた。前の週に交換した本を持ってきて、また別の
本とトレードしたいという方もおり、ブックトレードの仕組みが上手く回っていると感
じた。初めての取り組みでなかなか目に見える成果が得られないかもしれないと思っ
ていたものの、アンケートでも非常に好評な声をいただいたので、次年度以降定期的な開
催を検討している。

- 議 長 事前に本が 200 冊集まったということだが、これは、この企画を知った利用者から持ち込まれて集まったもので、当日イベントに参加した人は、本を持って来ていなくても、その場で本をいただけるということか。
- 事 務 局 事前に本をお持ちいただいた方には引換券をお渡しし、当日はその引換券を持って来てもらうことでトレードに参加できるような形をとった。それ以外の形としては、当日交換する本を持ってきた方もトレードに参加できるようにした。実際には、公園に定期的に来るご家族連れの方も多くいらっしゃり、「こういうイベントをやっているんだ、じゃあ来週は本を持ってきます」と言ってくださった方や、当日イベントを知って一旦家に帰り、すぐに本を持ってきていただける方などもいた。参加いただいた皆さんの関心は非常に高いと思った。
- 議 長 ぜひ継続的に開催していただきたい。ほかの図書館とも情報交換しながら実施していただければと思う。
- 事 務 局 若林図書館のYAサポーターのところで、「本の福袋」というお話が出たが、「本の福袋」とは具体的にどういうものか。
- 事 務 局 図書館職員が何冊か本を選び、書名や中身が見えないようにラッピングしたり袋に入れたりして、福袋形式で貸し出す事業である。例えば赤ちゃん向けや若者向け、あるいは泣ける本など、テーマに沿って職員が選んだ本を、書名や中身が見えないままで利用者が借りていく。各館でも行っているが、とても好評で、「いつも手にとる本が限られているので、新たな本に出会えました」というアンケート回答も多く、定着した事業になっている。今回は中高生の皆さんに自分がお勧めする本を選んで福袋をつくってもらったが、好評で全て貸し出しされた。
- 議 長 太白図書館のビブリオバトル観戦イベントについて、資料の写真をみると、観戦参加人数は資料に記載のある6名よりも多いように見えるが、ボランティアが多いのか。
- 事 務 局 大学生ボランティアがたくさん来てくれていた。また、当館の職員たちも写真に含まれている。
- 議 長 参加者は、中学生か、高校生か。
- 事 務 局 ほとんど高校生であった。
- 議 長 こういうイベントは、近隣の中学校や小学校にお知らせしているのか。
- 事 務 局 今回のイベントに関しては、学校に個別にお知らせはしておらず、ホームページやXなどインターネットを活用してお知らせをし、それに応えてくれた若者が多かった。
- 議 長 ネットで発信する情報は、受け取る側が自らその情報を取りにきてくれないと、その人に届かない。例えば中学校にポスターが1枚貼ってあれば、生徒がそれを通りがかりに見て参加につながるかもしれない。そのような情報発信の仕方も参加につながるきっかけになると思う。太白図書館の近くの長町中学校は、外に出て活動することに対して大変積極的な学校だと聞いているので、中学生の参加が多かったのかと思った。
- 事 務 局 長町中学校については図書委員会と連携している事業があり、そちらのほうで活動いただいている。
- 議 長 このイベントは非常に盛り上がったとのことだが、今後も継続的に実施する予定か。

事務局 続けていく予定である。この形式も面白かったので、また今後に向けて考えていきたい。

狩野富士子委員 幅広い年齢層を対象とした事業展開がなされていると感じた。赤ちゃんからお年寄りまでを対象としており、そういう図書館の努力は素晴らしいと思う。読書の習慣はどの年代できっかけを掴むか分からないので、今頃遅いのではないかと思っている人たちも、こういう事業がきっかけで図書館と出会うようになる、本と触れ合うようになるという、そのきっかけづくりとして、対象年齢を幅広く網羅されているのが素敵だと思った。

それから、発信の仕方という点では、先ほどビブリオバトルのお知らせをネットで発信という話があったが、以前泉区内の中学校に勤務していたとき、泉図書館からはいつも学校にチラシでのお知らせが届いていた。そして、それをきっかけに子どもたちがビブリオバトルに参加したこともあった。今の時代はネットでの情報発信が当たり前になりつつあるが、学校では、例えば生徒がチラシを手にして、図書委員会で紹介をしたり、クラスで紹介をしたりということができるので、意外と今でも紙ベースが有効なのではないかと思う。発信の仕方はデジタルとアナログの併用が今この時代であっても大事なのではないかと感じた。

杉山秀子委員 図書館に来てもらうだけではなく、図書館から外に出ていくような、ほかの団体などとの協働事業がすごく多くなっていると感じた。それによって、図書館のPRだけではなく、もっといろいろな意味で交流が広がり、自ずとそういう人たちに知れ渡るといったのが見えてくるといった。

先日、他市の図書館の職員から、どうやったら図書館にいろいろな人たちを呼び込むことができるのか、特に乳幼児の親御さんをどうやったら呼び込むことができるのかを尋ねられた。そこで、やはり呼ぶことだけではなく、出向くことを考えていくのもいいのではないかとアドバイスをした。例えば乳幼児健診であったり、地域の何かの事業に入れてもらうような、そういう関係性ができるといいという話をした。先ほど各図書館からの報告を聞いて、地域の中に図書館が自然な形で取り込まれていくことが、より図書館が身近になるというところにつながってくるのではないかと感じた。

児玉忠委員 この資料で一番印象的だったのは、それぞれの館からの報告につけられた写真である。写真には、基本的に全部、人もしくは手づくりの何かが写っており、やはり図書館ってこういうことなのだろうと思った。大昔の図書館は本という物の管理が中心になっていたが、その後、調べ学習にも対応できるような広がりが出てきて、その後外に出向いていくような移動する図書館、最後はコミュニティーの場をつくっていくというような、基本は守りつつもどんどん進化している姿というのが、これらの写真で象徴的に表されていると思った。そういった意味では、図書館が持っているその潜在力を、どうやって世の中のニーズを掘り起こして連携させていくのかということからは、ますます知恵を働かせる面白いポイントになるのではないかと感じた。

渡辺祥子委員 それぞれの館で本当に細かく地域をご覧になって、それぞれの館の視点がある地域連携になっている点がとても良いと思った。令和5年度の重点事業に「地域の魅力の発掘・

発信」とあるが、本当に発掘し、それによって地域の皆さんも再発見ができ、地域がより身近になって、何か自分の生活に厚みが出てくるように感じる。そんなきっかけが図書館から生まれることで、またさらに重層感が増して豊かな心のまちになれる、図書館がうちの近くにあってよかったというような、そんな豊かさの源泉になっていくのではないかと感じた。

議 長 皆さんのお話を伺っていて、図書館が公民館や市民センターに近づいていっているように感じた。集う、学ぶといったことの拠点になっているように思う。

齋藤千里委員 乳児向けのボランティア養成講座というのが事業として挙がっていたが、私も受講し、今月、宮城野図書館の赤ちゃんおはなし会で体験をさせていただいた。

乳児向けだけでなく、図書館では毎年いろいろな講座をやっている。読み聞かせボランティアやストーリーテリングの講座など、ボランティアにとってスキルアップの機会をたくさんいただいている。図書館で誰でも受講できるという形は、参加しやすく何度でも受けられるので、すごく大事なことだと思った。図書館全体のいろいろな企画を見ると、本当に工夫されていて素晴らしいと思った。そういう学びの部分も、ぜひ今後も続けていっていただきたい。

議 長 チャンスがあればではなく、チャンスをつくって、何かに参加してみるというのもいいと思う。そうすると、より図書館が身近に感じるような気がする。

5 協議事項

(1) 令和6年度仙台市図書館運営方針・事業計画策定に向けた「重点事業」案について

(市民図書館副館長 報告)

資料2に基づき説明

[委員からの質問・意見等]

小林直之委員 方向性4の「図書館資源の適正配分」について、「図書館資源」という言葉は、この協議会で初めて出会った言葉である。図書館の資源とは一体何なのだろうと、いろいろな本を読んでみたところ、多くの本に、図書館の資源とは書籍だけではなく人であるということが書いてある。そこに人がいることによって、図書館がいわゆる書庫ではなく施設になる。本を人に提供する方、司書の方や職員の方、それが図書館の資源であるということに行き当たる。

そうすると、今回、令和5年度重点事業「(4) 図書館資源の適正配分と活用」から進化して、令和6年度重点事業案の(4)が「職員の資質と専門性の向上」となっているとところが非常に的を射ており、大事なところだと思うので、ぜひ推進していただきたい。図書館で働く皆様が、楽しく働けて、図書館で働くことが自分にとってもいいことであるというところまでつながればと願う。

竹内透史委員 これをもとに細かい来年度の事業が決まっていくというお話だったが、(1)について、令和5年度重点事業で「地域の歴史」という言葉が入っており、細かい事業計画では、例えば震災関係のものが入ってくると思うが、今回の(1)を見ると、そういうところが薄れているような気がする。

昨年10月末に横浜市で図書館総合展が行われたときに、宮城県図書館では東日本大震災関係の展示をした。だいぶ年数は経ったものの、市町村図書館がどのように復興してきたかという内容で行ったところ、来場者による投票で結構上位に入った。もう十何年も経っているものの、外の方々にはすごく興味を持って見てもらい、しかも評価もしてもらえるというので驚いた。また、宮城県では震災アーカイブを持っているが、一昨年の3月の大地震の後など、災害があるとすごく利用が伸びる。今年も元日に能登半島地震があり、やはり発信していく義務はあると思う。仙台市図書館でも貴重な資料をたくさんお持ちだと思うので、そういうところは必ずつながりを持ってずっと事業として入れ続けていただく義務があるのではないかと思う。宮城県の図書館として、県図書館だけではなくて市町村図書館にもその義務はあると思った。

(2)について、先ほどの今年度の事業の報告でYA世代が話題になっていたが、やはりYA世代に対しての図書館からの働きかけはなかなか難しいと思っている。乳幼児を対象とした事業に力を入れたいというのは分かるが、実際はたくさんの乳幼児親子に利用されていると思う。しかし、中高生などのYA世代は図書館の中であまり見かけない。中学生も高校生も部活や勉強で忙しいと言われていて、時間を持て余して早く家に帰り、自分の部屋でSNSやゲームなどをして過ごしている子もいっぱいいると思う。そういう子どもたちの居場所づくりとして、文科省も図書館を挙げてきたと思うが、そういうYAに対する効果的な働きかけを考えなくてはいけないと思っている。

また、障害がある方々の利用促進を考える際、知的障害がある子がそこからこぼれてしまう可能性が出てくる。図書館に来ているけど障害が見えないとか、働きかけられないとか、知的障害がある方の周りの方々は、図書館を利用したいと思っても図書館に迷惑をかけると危惧し、なかなか自分たちの権利を表に出してこない傾向があるように思われる。そういうところも考慮に入れて、計画そのものやこの重点事業の文言そのものではなく、事業につなげていくときにそのような視点をぜひ持っていただきたいと思う。

議 長 YA世代への対応についてはもう既になされているところも多いが、小学校高学年、中学生、高校生になると、きっかけさえ与えれば自分たちで事業の企画や運営を回していけるようになるし、回していってもらわなければならない。いつまでも図書館でサポートするというわけにもいかないのだから、子どもたちが自分たちで事業を回せるようなきっかけづくりを図書館にはしていただいて、そしてそれを各図書館でつないでいくようにしてほしい。そうすれば、YA世代も、自分たちがやっていることが大きくなっていて、読書を通じた若い力のアピールや、すごい活動をしているというような自己肯定感のようなものにつながっていくのではないかと思う。

先日の子ども読書活動推進計画の会議で、視覚障害のある方に図書館として本をサービスしていくうえで、有効な手段が案外ないと言っていたが、現状はどうか。

事務局 子ども読書の会議では、目の見えない親御さんが目の見える子どもに読み聞かせをするために、点字のシールが貼ってあるような絵本があるという紹介がされたが、仙台市の図書館にもそういう絵本がある。お話の部分が点字になっているだけではなく、絵の輪郭が盛り上がった、少し立体的な印刷になっていて、指でなぞることで絵の形もわか

るような絵本がある。

また、対面朗読というサービスを目の不自由な方向けに行っており、そのサービスを定期的に利用される方もいるなど、目の不自由な方も図書館に来られている。

竹内透史委員 視覚障害の方向けの取組みについては、図書館はずっと続けてきていると思う。今の考え方は、いろいろな方がそのバリアを取り払って図書館サービスを受けられることを目指すというものである。そこはもちろん障害だけではなく、何らかの原因で図書館に来られない、その理由がバリアというような、そういう大きな考え方をしている。なので、視覚障害者に関するサポートというのは、仙台市図書館でもされていると思うし、宮城県図書館でもやっている。ただ、そういったことを踏まえた上で、できればそこから漏れてしまっている、もっといろいろな障害があつて潜在的に来られない人たちに向けた取組みをやっていただきたい。

議 長 方向性1のところでは竹内委員がおっしゃったことは、歴史だとか、そういったこれまでのところの部分が文言として抜けてしまったことに対する不安か。

竹内透史委員 もちろんこれまで取り組んできたことも続けられるのだと思うが、その確認という意味で意見させていただいた。

議 長 こういったことを通してシチズンシップを高めていくことが大事になってくるのかと思う。

令和6年度の重点事業案について、ご提案どおりということではよろしいか。

各 委 員 了承。

議 長 各委員からご意見いただいた部分については、配慮していただくよう事務局にお願いする。

(2) 今後の図書館のあり方について

議 長 今後の図書館のあり方については、令和4年5月の会議で図書館資源の適正配分を取り上げてから、前回、昨年11月の会議まで1年半にわたり協議してきた。この間、委員の皆様からは、新たな指定管理の導入についてだけではなく、公共図書館としての理念と方針のもと、図書館が重点的に取り組んでいかなければならない課題や、指定管理を導入する一方で、中央館あるいは直営館の充実が必要であるなど、様々な視点からご意見をいただいたところである。本日は、これまでの議論の取りまとめとなる。

(市民図書館副館長 説明)

資料3に基づき説明

[委員からの質問・意見等]

議 長 4ページの今後の図書館のあり方については、前回の会議で確定したということである。今回は、30期から始まった議論の経緯などを説明していただき、改めて、どういう議論をしてきてここに至ったのかということがわかるような形になっている。特に資料3の3ページでは、皆様方から出た意見について項目ごとに取りまとめているので、こういったことも反映して、今後図書館の運営を担っていただければと思う。

児玉忠委員 資料に丁寧におまとめいただいて、私に関わる前の議論も整理されていたので、なるほどと思った。この議論は、そもそもは費用対効果を上げる、つまり縮小していく社会の中で図書館をどうやって守るのかという費用対効果の問題として始まって、資源の適正配分とか効果的な図書館資源の活用とか、そういったことがおそらくスタートの議論としてはあったと思う。ただ、それは決してお金だけの問題ではなく、やはり図書館の機能というのをどう守りながら新しいものをつくるのかということで、この協議会はそのことをずっと議論してきたのではないかと思う。

そういう意味で、資料3の3ページの委員の意見のトップに人材育成を挙げていただいたのはとてもありがたいと思っている。先ほど小林委員からもあったように、まずは人材の問題があり、人材をどう守っていくか、そしてその人材が生かされ、持続可能な図書館のために直営館と指定管理館がシナジー効果を上げていくということが、我々の出した結論なのだろうと思う。そのあたりを今後もしっかりと意識しながら、より具体化を図っていただくといいのではないかと思った。

高橋由臣委員 図書館の業務のなり手について、サービスを向上させるにあたって、十分な人材が確保されているのか、図書館の業務を目指すところの人材確保は今どういう方向に向かっているのかということをお伺いしたい。そこが目減りしてしまうと、安定したサービスも維持されないのではないかと考えている。

事務局 まず直営館に関しては、仙台市教育委員会という組織の中の一員であるので、仕組みとしては通常の職員の人事異動の一環として位置づけられているものである。ただ、当然、図書館としては、司書の資格を持っている職員、また、それ以上に図書館の業務について熱意を持っている、図書館業務をやりたいと希望しているような、そういった職員を配置してもらいたいということは、人事異動の面で要望しているところである。そうした積み重ねもあって今一定のサービスを提供できており、図書館の業務が機能しているところである。もちろん今後も毎年そうした要望をし、人材を確保していきたいと考えている。

指定管理館に関しては、指定管理者を選定する段階で、司書が何%以上といった一定の基準を設けており、それをクリアした上で、かつ、いろいろなプレゼンテーションなどを経た上で選定しているという経緯があるので、そういった面で人材の確保はできているものと考えている。

議長 なかなか社会全体で考えると難しい視点もあるが、現場の司書の方と接すると、本当に能力、資質が高いと感じる。そういった方々とともに仕事をする中で人材育成をすることもできるだろう。また、若い世代の子どもたちが図書館の現場で働く職員の姿を見て、将来の職業選択のモデルになっていくのではないかなとも思うし、そうやってほしいと思っている。

矢嶋哲也委員 私も議論に加わったのが途中だったので、なるほどと思いながら、資料で前回までの議論を確認させていただいた。この協議会の議論に加わるまで、私自身、直営館と指定管理館という枠組みを分けて仙台市図書館そのものを見ることがなかったので、そういう考え方が、捉え方があるというのがまず新鮮であった。

一方で、仙台市図書館を使う市民の方というのは、おそらく直営館と指定管理館という分け隔てはしていないと思う。それぞれの役割を出しつつという形で直営館、指定管理館を分けてはいるが、まずは均質なサービスを心がけていただいて、それをベースとして、その上でいろいろ特色を出していただくことに努めていただきたい。市民目線から見て、直営館、指定管理館あわせた形で仙台市図書館という組織そのものを盛り上げていってほしいという気持ちがある。

議 長 まさしく、この3ページに書いてあるとおりでと思う。市民にとってはシームレスであるが、運営する側の立場としても、サービスは基本的に均質であって、その上で特色を出していくという形である。現在もそれは実践、実行されていると思うが、子ども読書活動推進計画であるとか、あるいは高齢者の生活であるとか、そういうところとリンクしながら市民生活を支えていくということが大事なのではないかと思う。

小林直之委員 私は前期から継続して議論に参加してきたが、本当に長い道のりだったなと思う。このテーマの議論をする前の図書館の印象や、この会議で議論してきた様々な図書館の問題というのを思い出せないぐらい、大きなテーマとして位置づけられてきたのではないかと思う。直営館と指定管理館というものに思い切って手を入れ、それぞれのことを議論したというのもおそらく初めてだったと思う。直営館と指定管理館の特長というものを見だし、その上で均質化して、さらにそこに個性を出していってほしいという、非常に難しい注文を我々委員は出したように思う。その注文を丁寧に文章として整えていただき、図でも整えていただいて、そして理念にもなったということは非常に良かったと思う。本当に事務局の皆様のお力だと思う。

議 長 本当に事務局の皆様、大変な作業だったと思う。

今後の図書館のあり方については、図書館協議会としては今回の会議をもって議論の取りまとめができたので、今後は仙台市で協議会の意見を踏まえて、資料3に示された内容の具体的な実現に向け、さらに検討を進めていただくことになる。

仙台市で体制再編を進めていただく際は、資料3の3ページの最後の部分にまとめていただいたように、ただ指定管理を導入するということではなく、協議会において議論してきたとおり、公共図書館としての理念と方針のもと、中央館としての市民図書館及びそれ以外の直営館の充実もあわせて行うことが必要であり、その上で今後重点的に推進すべき課題に取り組むことについて留意していただければと思う。

長く議論していただいたが、これでこの議論は終了とする。

各 委 員 了承。

6 その他

狩野委員から読書感想文コンクール結果の情報提供
事務局から次回の協議会の案内

7 閉会